版画領域におけるリモート授業の可能性と考察
―視覚芸術教育指導の立場から―

牧　野　浩　紀

キーワード：版画、版画教育、版画技法、リモート授業

はじめに

本稿は、筆者が 2020 年度から桜美林大学芸術文化学群ビジュアル・アーツ専修に特任講師として着任し、担当した「ビジュアル・アーツ基礎」、「美術演習 A」、「専攻演習Ⅰ」の版画領域をリモート授業として実践し、技術の習得のための実習教育活動の場として成立するのかについての報告である。

2020 年春、桜美林大学の芸術文化学群は新校舎、東京ひなたやまキャンパスに移転が完了となった。時を同じくして、感染症 “COVID-19” コロナウイルスの本格的な渦に入り、大学全体でキャンパスを利用しない授業の計画を立てる事となり、有用な学習法を模索する必要に迫られた。ここでは筆者が実践した５つの版画領域におけるリモート授業の取り組みについて記すものとする。その内容は以下である。第１章 ビジュアル・アーツ基礎「拓彩表現」、第２章 美術演習 A（洋画―技法 A）「銅版画、シルクスクリーン、リトグラフ」、第３章 専攻演習Ⅰ「版画４形式の基礎、応用の確認と木版画の実演」の授業のふりかえりと今後の課題を検証する。

そもそも版画表現は工房設備の使用により様々な技法表現が可能となる部分が大きい。しかしリモート授業では、実際の学びの場となるほとんどの学生の自宅には大学の工房の様な広さや設備の準備が無い。そのため、今回の限られたスペースと設備での版画作品の制作についてリモート授業を通し、対面実習との比較も考察する機会に繋げたい。初の試みとなった版画のリモート授業の雰囲気を出来る限り正確に伝えるため、筆者の撮影した写真に加え学生が撮影した写真についても、そのまま掲載するものとする。

第１章：ビジュアル・アーツ基礎 版画「拓彩表現」を通して素材を扱う力を養う

１年生６グループが対象 各 25 名、１日２時限×２日：合計３時間 40 分

概要：ビジュアル・アーツの幅広い表現分野について、主な技法や考え方をひと通り学ぶ

演習授業である。「日本画」「立体造形」「テキスタイル」「映像」「プロダクトデザイン」「版画」の６つの分野を、２週間ごとに６つのグループがローテーションし学んでいく。

1-1　１日目　版画「拓彩表現の解説と実習」

２日間の授業計画として、１日目「参考作品の鑑賞、道具の準備、試作としての拓彩を実習」、２日目「参考作品の鑑賞、１日目の復習、提出作品としての拓彩を実習」として、２日目に提出作品が完成するよう指導を行なった。また、「拓彩表現」について記す。それは形を写し取りたい素材「紐や定規、コインなど」の上に湿した紙を置き、タンポ（打包）で色打ちする事で画面構成をしていく版画技法である。１日目は、各自１点の試作を完成させることを目標とした。始めに、イメージを掴んでもらうために、参考となる作品のデータを数十点鑑賞してもらい、次に道具、準備、手順を説明した。続く実習は手順毎に、教員による実演を追う形で進めるよう指示を出し作業に入った。最初の準備として拓本専用の紙をイメージサイズに合わせてカットし、続いて紙を湿すためにタオルや新聞紙を湿して「床」を作り、紙を差し入れる。さらに道具となるタンポ（打包）の作成と絵具の準備を整えるよう指示を出し、その後、各学生がイメージに合わせて配置した素材の上に湿した紙を乗せタンポ（打包）で色打ちし刷版する。１日目は学生によっては数点の作品を制作する事と、手順や摺りの感覚も習得出来き、２日目の実習方法へと繋がったようである。

1-2　２日目　版画「拓彩表現の可能性を探求する」

２日目　この日の目標は、１日目の実習を踏まえて提出作品を仕上げることとした。1

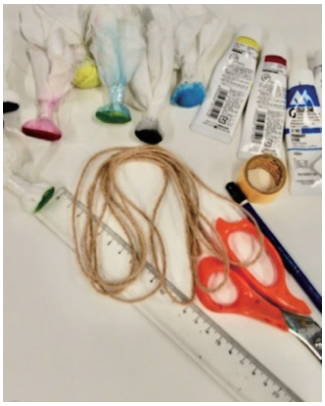

図 1-1

図 1-2

図 1-3

「図 1-1 拓彩に使用する道具　定規やハサミなど日常生活の中の身近な道具や物を画面構成に利用する」
「図 1-2 課題１日目（試作）、図 1-3 は試作からの経験を活かした２日目の提出作品　1 年 三井萌楓」

日目の参考作品の鑑賞が制作に活きる手応えがあった事から、２日目も参考作品を鑑賞する事から始めた。その後実習に入り、それぞれ数点の課題作品を完成させる事が出来た。ゆえに２日間の拓彩表現の解説と実習のリモート授業では、素材を支持体とし、形を写しとる事で生まれる表現の可能性を体験してもらう事が出来た。また、提出作品は学生の実習作業時間が長いほど質が高くなる傾向があり、１グループ２日間という限られた時間内で、教員と学生双方の作業手順の理解や手際が求められる事を実感した。

ビジュアルアーツ基礎の取り組みからの考察として、「拓彩表現」では、すでにある形を利用し自由な画面構成と、色彩感覚の向上を目標とする表現手段の実習として、他の授業との差別化を計り、リモート授業としても成立しえる事が伺え、今後も対面授業を含め、改善点も考慮しつつ、実習に取り入れていきたいと考えている。

第２章：美術演習Ａ（洋画―技法Ａ）「銅版画、シルクスクリーン、リトグラフ」を学ぶ

全学年が対象　２クラス合計 24 名、１日２時限× 14 日：合計 46 時間 40 分

概要：美術演習Ａ「洋画―技法Ａ」では、版画領域を実習し、全 14 回の授業の中で３つの版種（銅版、シルクスクリーン、リトグラフ）の制作を行う。各技法については、それぞれの授業の始めに道具の扱いと表現方法について講義をし、作品制作を通じて多様な版表現の世界を経験し、新たな自己表現の探求を目標とする。

2-1　銅版画表現「ドライポイントによる下絵の制作、描刻、刷版」

美術演習Ａ「洋画―技法Ａ」１形式目の銅版画では、描刻の技法としてドライポイント（直刻法）を用いた。今回はリモート授業のため、全員が作業内容を把握出来た状態での

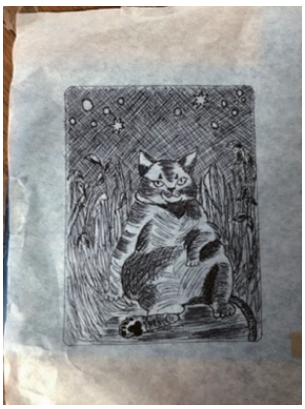

図 2-1

図 2-2

図 2-3

「図 2-1/2-2/2-3 版下、銅版へ転写、ニードルによる描刻　４年　鈴木このみ」

実習を目指し、事前の解説と準備に十分な時間を設けて行なった。実習はまず、銅版に下絵を写す「トレース」から入った。その後、ニードル（針のような道具）でドライポイントによる描刻に移った。描刻は個々の手加減により線の強弱（太さ）が決まるため、一投目の描刻については手の力を抜き弱く当たりを付けるように指導をした。この方法であれば痕跡をなぞる事で、より強い線にする事も出来る。思うにリモート授業では手加減の説明が難しく、実習の合間には参考となる web 動画の紹介や、参考作品の鑑賞時間なども取り、多角的な指導を心がけた。刷版方法にはプレス機を使用せずに刷る事が出来る「石膏プリント」を選択した。この刷版技法により、学生の自宅で「銅版画をプレス機無しで刷る」という事が可能となった。

描刻を終えた後は、銅版にインクを詰める作業となる。実際のところ大学の工房を使用せず刷版する作業は、インク汚れの心配など学生によっては負担も見受けられた。そのため手順を「版と道具の準備」、「インクの準備」、「拭き取りに使用する寒冷紗、人絹を使用したタンポ（打包）の作成」の３つに分割し、作業毎に説明と実演をし、直後に作業を進めてもらった。銅版にインク詰めを終えた後、石膏プリントに入る。履修学生による刷版は教員の実演を細かな工程毎に追う形で進めてもらい、ほぼ全員が１回の実習で刷り上げることが出来た。

結果、リモートによる銅版画実習のまとめとして、学生の反応によると限られた設備とスペースで銅版画を「描刻から刷版まで」実習出来た事には驚きがあったようだ。特にプレス機を使用しない「石膏プリント」を経験できた事は、コメント等から銅版画を手軽かつ身近に感じられた事が伺え、対面で実習する場合にも取り入れる事ができ、プレス機を

図 2-4

図 2-5

「図 2-4 石膏プリントによる大胆な描刻からの刷版が印象的な銅版画　４年 鈴木このみ」
「図 2-5 石膏プリントによる階調を意識し、繊細な色の強弱を表現している銅版画　２年 木村真衣」

使用する刷版に加え、情報を提供し指導する事は必要と考えられる。

2-2　シルクスクリーン表現　「手描きによる製版、１版を使用した単色と多色の刷版」

美術演習 A「洋画―技法 A」の２形式目は、シルクスクリーンの実習とした。リモート授業でどこまでシルクスクリーンが出来るかを検証する側面もあったため、限られたスペースでも作業しやすい１版単色および多色法を行う事とした。はじめに、授業では版の解説をし、シルクスクリーンの長所である「色面を活かした表現」を意識してもらった。現在シルクスクリーンの製版方法には幾つか種類があるが、今回は環境に左右されにくく、限られたスペースでも行える手描きによる描画と熱感硬化皮膜（乳剤）を使用した方法を採用した。しかし学生の中には、大学での露光機を使用した製版のイメージが強かった事もあってか、自宅で露光機を自作し、写真製版を成功させた一例があった。（学生の露光機は実習期間内に完成し、その機能は十分実習で機能するレベルであった。）製版に続いての刷版に使用する絵具は、アクリル絵具にリターダー（遅乾剤）を混ぜる事で使用可能となる。全員が製版を終えたところで刷りの実演を行った後、各学生による実習に入った。結果、全員が１つの版で単色表現と多色表現の両方を実習する事ができた。多色

図 2-6

図 2-7

「図 2-6 教員による紗枠への製版」「図 2-7 この後に乳剤を塗布し完了」

図 2-8

図 2-9

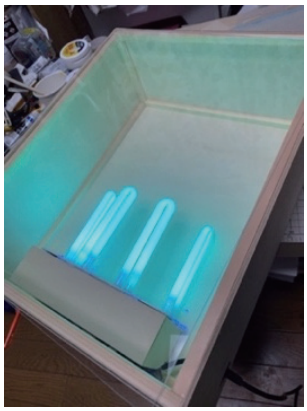

図 2-10

「図 2-8 工房の露光機」「図 2-9/2-10 自宅に露光機を自作　４年 井原貴紀」

図 2-11

図 2-12

「図 2-11 版をずらし刷版したシルクスクリーン作品　４年 丹羽萌」
「図 2-12 １版を使って単色、多色２種の表現を実践したシルクスクリーン作品　４年 井原貴紀」

表現は複数の版が必要であるという固定観念を打ち払う目的もあったが、１版を使っての複数の刷版を体験することにより、自身で考え刷る表現を会得する機会となり、「版をずらして刷る」などの工夫も見られたことから、リモート授業でも十分に版の理解を得る事が可能と判断できる。

2-3　リトグラフ表現　「リトグラフを自宅で描画、製版、刷版」

美術演習 A「洋画―技法 A」の３形式目は、リトグラフを実施した。これは平圧プレス機で刷版する技法である事が大きな課題となる。描画や製版については参考動画も web 上にあり、自宅でも十分に実習が出来、描いたままのイメージが版画になるのがリトグラフである。また、ダーマトグラフや解墨を使用した描画が一般的だが、その場合は製版の必要がある。今回は製版の作業を省く事とし、そのために描画材は強い油性分の「ソリッドマーカー」に限定する事とした。ところで刷版については、プレス機を使用しないリトグラフの刷版について研究資料が乏しく、筆者がこれまでの大学の授業やワークショップ、大学関係者からの情報により知り得た方法を２通り実行する事とした。１つ目は「踏み刷り」、２つ目が「ガラス瓶を使用した刷り」である。踏み刷りについては、多摩美術大学名誉教授である小作青史氏が考案し、プレス機の無い環境での刷版に成功している。実は初めはこの方法のみを学生に指導する予定であったが、授業も後半に入った頃、銅版画のガラス瓶による刷版が可能である事を知る機会を得た。筆者がこの方法をリトグラフの刷版に応用し、実際に検証したところ問題なく刷る事が可能であったためガラス瓶による刷版を取り入れる事に至った。

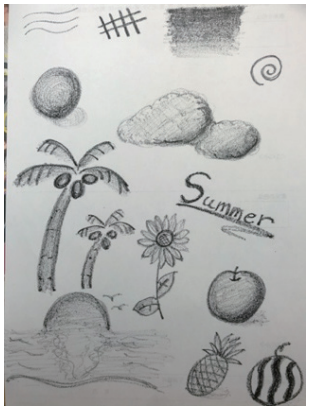

図 2-13　　**図 2-14**

「図 2-13 はソリッドマーカーを使用し紙に練習」「図 2-14 はアルミ版にソリッドマーカーでの描画の様子」

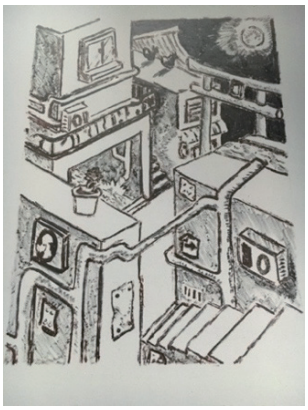

図 2-15　　**図 2-16**

「図 2-15 しっかりと描きこまれ、版画特有の文字の反転描写も行なったリトグラフ　２年浜中理沙」
「図 2-16 濃淡を意識し、階調を活かしたリトグラフ２年　坂入圭亮」

結果、自宅でのリトグラフ実習は、限られたスペースと設備で作品を完成させる事が出来き、リモート授業を通して版への理解を損なう事なく指導出来たと考えられる。

第３章：専攻演習Ⅰ　「版画４形式の基礎、応用の確認と木版画の実演」

３年生が対象　３名、１日２時限× 14 日：合計 46 時間 40 分

概要：版画４形式（木版画、銅版画、シルクスクリーン、リトグラフ）の中から１つもしくは複数を併用し版画作品を制作する。版画の実習をメインとし、版画領域の更なる探求を目標とする。

3-1「版画領域の基礎実習から応用の解説と、木版画摺りの実演」

専攻演習Ⅰ「版画」の実習では、履修学生が選択する版種を確認し実習をしてもらった。はじめに、イメージとなる「下絵」をデータ化し moodle から観覧出来るよう履修学生へ指示し、改善点について教員が解説を行った。基本の確認として、第 2 章の美術演習での実習の復習と、応用としては、彫刻刀の研ぎ方、作品の水張り、袋張りなどの道具の手入れや作品の完成度を高めるための工程を掘り下げて指導をした。また、主な実習手段として木版画を選択する学生が多かった事から、教員が木版画による多色多版（小作品）から、単色単版（大作品）までの摺りを実演した。ここで重要と感じたのがカメラの位置であった。専攻演習の学生に、実演を理解しやすいカメラ位置を確認したところ、正面上で少し離れた位置からが理解しやすいとの回答が多く、その位置から実演を観覧してもらう事とした。実演は対面で見る事で、動作の確認等、より理解度が上がる部分もある。しかしながらリモートカメラによる実演も全員が同じ位置から見られる点で、視点に差が出ず理解のずれが最小限に抑えられると推測された。また、細かな作業については映像の解像度の不安定さがあったため、画像データを共有し説明する事で解決した。

結果として、リモートを通しての実演について対面と比較して理解度は遜色ない事が伺え、履修学生の実習では摺り手順を掴むことができており、刷毛やバレンの使用方法と絵具の水分量、ぼかし摺りまでをサポート出来ている事が確認できた。ただし、専攻演習では「実際に展示をするという事」が必要な学年となってくると考えられる。4 年生からの卒業研究に繋げるためにも、3 年生の期間に展示を経験する事は必要である。オンラインでの展覧会も可能であるが、展示会場を訪れ「版画作品の質感に触れる機会」を作るための考察は今後の重要な課題となった。

図 3-1

「図 3-1 教員による木版画の刷版の実演の様子」

終わりに

日本の大学でのインターネットの普及は、1984 年にいくつかの大学間でパケット通信網により接続することから始まり、80 年代後半には基盤が拡大し、教育現場での通信環

境が整っていった。そして現在では、リモート授業までを行う事が可能となっている。今回のリモート授業を通した結論として、教育機関は新しいコミュニケーションシステムをさらに活用し、その上で人の繊細な行動観察も考慮するため、対面での実技訓練を伴う実習も大切にしていく必要があると感じさせられた。今回は、自宅という限られたスペースで履修学生が実習をし、工房に通う事にかなり近い内容で授業を実施することが出来たと考えられる。今後どのような方法で授業を実施できるのか、実技訓練を伴う授業がどこまで限られたスペースと設備で行えるのか、また、対面ならではの有用性について検証と実証をし、さらに双方を取り入れ考察する機会を得たいと考えている。

注釈：

タンポ（打包）：色を紙に叩いて乗せるための道具。
床：湿した紙を覆い、長時間にわたり乾燥防止をするための処置のこと。
刷版：版を刷ること。
直刻法（ドライポイント）：銅版に直接道具を使用し刻む技法。
描刻：版を刻んでいくこと。
製版（リトグラフ）：描画を油性分の強い皮膜に変更し、刷版に備える事。
1 版多色法：1 つの版のみを用いて幾つかの色彩を使用し刷版する技法。

参考文献：

(1) 単行本：深澤幸雄（著）［1989］「銅版画のテクニック」 ダヴィッド社
(2) 単行本：吉原英雄（著）[1995]「吉原英雄のリトグラフ」 河出書房新社
(3) 単行本：中山隆右（著）[2014]「版画技法入門講座」 阿部出版
(4) 単行本：黒崎彰（著）［1999］「NHK 趣味入門」 日本放送出版協会
(5) 単行本：牧野浩紀（監修）［2017］「木版画上達のコツ 50」 メイツ出版
(7) Web サイト : 東北芸術工科大学 学長ラウンジ #12 美術科・版画コースのリモート授業 ～道具のない自宅でどうやって刷る？～（最後に猫のジャンゴも登場）
https://www.youtube.com/watch?v=x7O0Fexu9fI

謝辞：

緊急な対応が迫られる中、桜美林大学によるリモート授業に有用な資料の提供、web 動画の解説、そしてビジュアル・アーツ専修の先生方からのアドバイスに深く感謝いたします。